

The Great Gatsby にみる人物像

山中 祐子

(受付 2009年10月30日)

はじめに

F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* が書かれたのは、第一次世界大戦後のアメリカである。当時のアメリカ社会の価値観は、一方で初めての大きな世界戦争が与えた喪失感や不安、他方で戦勝によるニューヨークの繁栄や華やかなアメリカン・ドリームへの憧れという反対方向のベクトルが混じり合い、大きく変容しつつあった。*The Great Gatsby* は、そういう時代を背景とした小説であり、登場人物には、作者の種々の面が投影されている。そうした時代をフィッツジェラルド自身の人生と対照させながら、その作品 *The Great Gatsby* に登場する人物の生活や意識を考察してみたい。

I. 時代背景

先ず、フィッツジェラルドの生きた時代を歴史年表的に概略辿ってみよう。彼は1896年にミネソタ州に生まれ、1940年にわずか44歳で死没している。彼の小説家としての活動期間は1920年に『楽園のこちら側』(*This Side of Paradise*) が発表されてから1940年までの20年に亘っている。彼の生まれる約30年前の1865年に南北戦争が終わり、奴隷解放令が全米に行き渡る。また、彼の小説家活動が始まる1920年には女性参政権が法制化され、女性の自立と社会進出が社会の新しい動きとなって活発化していった。

男性達は、出身や階級を問わず、才能と努力さえあれば経済的・社会的成功をもたらすアメリカン・ドリームを求め人生と未来を賭けて果敢に挑戦していった。

一方、女性達には、生産方式が順次工業化されて工場での大量生産が始まる中で、生産の担い手として女工という新しい職種が生まれた。多数の若い女性が都市部の工業地帯に集められ、彼女達が一人で暮らすライフスタイルが広まっていった。その結果、彼女達はこれまでの家庭内で常時男性に仕え、夫に支配されるという生き方から解放されることになった。また、一部の女性はスポーツ分野でオリンピックや欧米の国際大会に出場して、テニスやゴルフという分野で女性スターが誕生していった。また政治の分野でも初めての女性市長や女性知事が誕生した。すなわち一部であるが女性の経済的自立が進み、社会的名声や地位の獲

得がなされ、それが社会の底辺で働く多くの女性に自由への希望と勇気を与えていったのである。

また女性達の自立や家庭内での自立は、それまでの妻は夫の所有物であるという家族意識に革命的な変革をもたらした。

こうした背景のもと、社会が男女それぞれに期待するものも大きく変化していき、男性にはアメリカン・ドリームへの勝利者にならねば男性失格という見方が強まる一方、女性には新しい選択肢が拡がり、それにより旧来の女性らしさに拘らない生き方が可能になってきたといえる。

上述したようにアメリカン・ドリームに憧れるアメリカ社会の中で、それを手にしようとする男性達はもちろん、新しい生き方に目覚めた女性達もフィッツジェラルドの代表作 *The Great Gatsby* の中に登場する人物像として巧みに描かれている。

フィッツジェラルドはこの時代のアメリカ社会の大きな変革の最中に生まれ育ち、社会と家庭内での権威構造の大変革を、身をもって体験しながら育ったのである。フィッツジェラルドが生まれ育った環境がどのようなものであり、それが彼の内面世界の形成にどのように影響を与え、そしてそれらが彼をどのように構想力豊かな作家に育てていったかを次に考察する。

II. フィッツジェラルドの家族像

II-1. フィッツジェラルドの父親像

フィッツジェラルドの作品においては、男性主人公にはフィッツジェラルド自身の経験や感性がそのまま移入されている部分が多いのであるが、親に関して言えばほとんど描かれておらず、*The Great Gatsby* の中で、フィッツジェラルドの父親を連想させる人物が現れるのはギャツビーの死後、ギャツビーの父親が葬儀のために中西部から出てくる一場面だけである。

The Great Gatsby に描かれている父親は、息子のギャツビーを誇りに思い、葬儀の際はわざわざギャツビーが子どものころに持っていた *Hopalong Cassidy* というぼろぼろになった古い本を持参し、Benjamin Franklin を手本としたものと思われる「時間割」と「誓」を Nick に見せる。ここには「成功への道」につながる、とフランクリンが勧める13の徳目のうち、「早寝早起」「勤勉」「節約」「節制」「清潔」などが示されている。これらの徳目は道徳教育的には優れているが、野心家のギャツビーは、勤勉実直さだけでは社会的成功すなわちアメリカン・ドリームを実現することは難しいと考え、社会の勝者になりたいと切望する少年ギャツビーを成功へ導く大切な武器として「雄弁術」を付加しているのである。これは、フィッツジェラルド自身が父親から受け継いだ勤勉実直の価値観だけでは物足りず、自ら編み出した成功への秘訣を付加したものと思われる。

ギャツビーが家を飛び出した時には、“Be better to parents.” (p. 174) と書いたにも関わらず

His parents were shiftless and unsuccessful farm people—his imagination had never really accepted them as his parents at all. The truth was that Jay Gatsby of East Egg, Long Island, sprang from his platonic conception of himself. He was a son of God—a phrase which, if it means anything, means just that—and he must be about His Father’s business, the service of a vast, vulgar, and meretricious beauty. So he invented just the sort of Jay Gatsby that a seventeen-year old boy would be likely to invent, and to this conception he was faithful to the end. (p. 99)

とあるように両親を否定している。ギャツビーの眼からみた父親は、不甲斐なく物足りない。彼は“shiftless and unsuccessful farm”を受け入れることが出来ず、否定し、そしてその反動で家を飛び出してしまふのである。

換言すると、ギャツビーは自分の持って生まれた境遇に満足せず、親と故郷を捨てて社会的野心に駆られて東部にやってきたのである。このギャツビーの自意識は、自らの潜在能力の可能性を高く自認したいために、無能な父親を否定し、その影を消し去ろうとしていると考えられる。こうまでして父親を否定し、自らの未来の可能性を広げようとするのは何故だろうか。そこには、アメリカ社会が大きく変化し、そこに生きる人々が自分の過去に縛られることなく無限のアメリカン・ドリームに身を投じて生きられる世界が広がっていたからである。

そこで以下では作者フィッツジェラルドの実際の父親像に触れてみる。

フィッツジェラルドの父親は、古い家系の伝統を受け継ぐ上品さと礼節を身に付けた紳士であったが、不幸にして経済的才覚に欠けていた。そのため、フィッツジェラルドが誕生して以降、それまで経営してきた工場経営に失敗し、一介のセールスマンに落ちぶれ、更にはそれさえ解雇されるという転落の一途をたどり、ついにはアメリカン・ドリームを実現したといわれる妻の実家の経済援助に頼り、住居も転々と変えざるを得ない生活をしていたのである。

その姿はフィッツジェラルドには、父親は「由緒ある古い家系」の出ではあるが、その「由緒ある古い家系」であるが故の鷹揚さなどから工場経営さえできない男性に思え、また自らのプライドを隠して一般市民に取りいって物を売る、というセールスマンにも成りきれないという生活力のない不甲斐ない男に映ったに違いない。更に母親からは、そのような夫として語る言葉を幼少時より聞かされて育ったであろうことから、父親はダメな男性というイメージが心の中に深く刻まれていったようである。だから父親を反面教師として、自分は決して

父親のような情けない男性にはなるまいと誓って育ったのであろう。彼は、無能呼ばわりされる父親と自分を切り離し、未来を期待してアメリカン・ドリームを目指したと思われる。

アメリカン・ドリームを夢見るフィツジェラルドにとって父親は反面教師でこそあれ、決して「自らの将来像となる男性像」にはなりえなかったのである。

II-2. フィツジェラルドの母親像

フロイトによれば、人間は幼少期に親から超自我を植え付けられ、その後自分を巻き取り環境との協調性を獲得するための自我を形成していくものであるという。特に幼少期の超自我の形成については、一般にいわれている「三つ子の魂百まで」と同様に、幼少期の母親との密接な関係が決定的な影響を与えるものと考えられる。

ここで、フィツジェラルドの幼少期における自我形成に大きく影響したと思われる彼の母親について触れる。

フィツジェラルドは、先に生まれた姉二人を幼くして亡くした後に生まれた一人っ子であったことから、母親は彼を溺愛した。加えてフィツジェラルドの身体が目を見せないほど弱かったことが、極端な甘やかしの原因になったと思われる。

母親は経済的にも男性としても不甲斐ない夫への失望感から才知に溢れた息子に大きな期待をかけ、彼を溺愛した。この母親は、他人の前で息子を称賛し、息子が欲するだけ学校を休ませるなど、甘やかし放題であった。そのような母親の溺愛行動は、彼が15歳で親元を離れて東部の学校へ行くまで続いた。そのせいで、普通の男の子が反抗期になって母親離れを起こす少年期に、フィツジェラルドは虚弱であったがために母親の庇護と支配を受けて育ってしまい、この少年期が彼の自我形成を大きく歪めることになったであろうと思われる。

母親の溺愛の結果、若い頃のフィツジェラルドはしたい放題、わがまま放題にさせてもらい、いつしか「自分は何でも出来る」と信じ込む全能感を持つに至る。これが他者との正常な関係づけを築く自我の形成に大きな欠落をもたらしたと思われる。その結果、東部の学校に行っても周囲と歩調は合わせられず、教師や友達から非難され仲間外れにされてしまうのである。そういう中で、自立しようとするフィツジェラルドの自我は、自分の精神の上に支配者として君臨する母親からの逃走を試み、正常な子どもが少年期に反抗期として親離れする精神的成長を、彼は青年前期になってする羽目になり、このことが極端な母親否定に繋がっていったと考えられる。¹⁾

他方、フィツジェラルドが得た全能感とは実体のない幻想であるが、このような自我を植えつけられた人間は、その自我を脅かすものは親であれ、友人であれ、たとえ妻であれ、否定することによって自我の独立と安定を確保しようとするため、周囲との軋轢を引き起こしてしまうのである。また、この内なる全能感と外界が認める自分（現実）とのギャップに対

する苦悩が彼を追い詰めていき、彼の優れた構想力を生み出す小説家に育てたエネルギーになったと思われる。

フィツジェラルドの母親像を語る時避けて通れないのが、短編集 *Tales of the Jazz Age* (1922) の作品の一つ、“The Curious Case of Benjamin Button”である。この物語では、Button 夫妻に待望の子どもが生まれるのだが、その子どもが見るも哀れな老人として生まれ、そこから順次若返っていく、という奇想天外な人生の設定になっている。彼がこの小説で投げかけているのは、赤ん坊から老人へと移り変わる普通の人生を、逆の視点から見つめてみると、人生には多くの発見があることを示すことだったと思われる。

この出生から死へと向かう筋書きの中では、彼はどんなに実の母親を否定しようが、どうしても母親を描かずにはおれなかったようなのだが、実際の小説では、夫が妻の出産に駆け付けた時、まずは医師に“Is my wife all right?” (p. 308) と、問いかけて新生児室に駆け付け自分の子どもに直面するが、次には子どもの服装探しも父親が行う、と書かれているだけで、母親が不憫な子どもを産んだことへの苦悩などは何一つ書かれていない。仮にこの物語が現実であれば、母親は発狂し、子どもを殺して自殺するかもしれないほどショックを受けられるのだが、この小説では現場に登場して驚愕しているのは産科医と看護師でしかない。何故母親が不在なのか、これはこの小説に深い陰を落としている。

更に、主人公 Benjamin が、成長の過程においても相談を持ちかけるのは常に父親であり、たとえば、彼は自分が生まれたころより栄養状態が良くなってきているのを感じ、

He went to his father. “I am grown,” he announced determinedly. “I want to put on long trousers.”

His father hesitated. “Well,” he said finally, “I don’t know. Fourteen is the age for putting on long trousers—and you are only twelve.” (p. 316)

と、父と子は悩みを共有し、解決しようとする。そして“Finally a compromise was reached.” (p. 316) とあるように、常に成長の悩みについては父と子が妥協点を見つけ出す。“Father”, “The Button family”, “The Buttons”, “parents”, “Mr. and Mrs. Roger Button” という表現は出てくるが、母親が登場することは一度もない。

このように子どもの成長における大切な分岐点において、一度も母親が登場しないのは不思議である。普通であれば、不遇の子どもを家の中に隠して育て、母親が世間と戦う姿などが考えられる。

また、ベンジャミンは大人からだんだん子どもへと変化し、最後には幼児となって無邪気な眠りにつくのだが、ここでも時間を共有しているのは母親ではなく、“his nurse, Nana” で

あり、そして最後に思い出すことが出来なくなってしまっても、浮かんでくるのは、“Nana’s familiar presence” (p. 329) であり、母親ではないのである。

He did not remember. He did not remember clearly whether the milk was warm or cool at his last feeding or how the days passed—there was only his crib and Nana’s familiar presence. And then he remembered nothing. (p. 329)

このことも作者フィッツジェラルドにおける母親不在、あるいは母親否定を暗示している。

II-3. フィッツジェラルドの妻像

フィッツジェラルドにおける自己形成を語る時、彼と女性との恋愛を考察する必要がある。彼は最初に16歳のシカゴの金持ちの娘ジネブラ・キングに会い恋に落ちる。彼は死ぬまで彼女からの手紙を大切に保管していたといわれ、この恋は、彼の恋愛観を形作った最初の挫折である。彼は、この恋が破綻したのは自分に富と社会的地位がないからだと思い込み、彼の中に、富と名声を欲する気持ちが渦巻くのである。このような彼の持つ富と名声への憧れと嫌悪が、*The Great Gatsby* の中で主人公を通して表現されているといえる。

次に、彼はアラバマ州最高裁判所陪席判事の娘、ゼルダ・セイヤーと出会い恋に落ちる。ゼルダは美人で自由奔放で、才気に溢れた女性であり、二人は紆余曲折を経てついには結婚するのである。妻、ゼルダは美しく頭の良い女性である半面、怠惰で気まぐれな浪費癖のある女性であり、ついには統合失調症になり廃人のようになってしまう。結果的にフィッツジェラルドは母親と妻という、もっとも身近な女性との精神生活を完成できず、酒に溺れながら作家活動に逃避していつてしまう。彼の恋愛、結婚生活を別の視点から見ると、彼自身があれほど嫌悪してきた両親の結婚生活と酷似したものになっているのは皮肉である。

フィッツジェラルドは幼くして母親に溺愛され全能感を植えつけられていく中で、母親への心理的依存を深めていったと思われる。しかし青年初期にはこの母親からの分離独立を図る自立心が旺盛になり、これが母親こそ最も忌むべきもの、親であることを否定しなければいけない存在へと変貌し、この依存願望と自立の欲求による ambivalent な精神葛藤が彼の憧れの女性観を作り出していったようである。

彼は女性への依存願望と嫌悪感に苛まれながら、その不安な心境から逃れるために、逆に父親への思いを強めたとも考えられる。このことは、*The Great Gatsby* の中では息子の葬儀に母親は出席しない存在として描かれる半面、父親はわずかに登場する存在として描かれていることに反映している。しかし、父親もまた影の薄い存在に過ぎない。

前述したようにフィッツジェラルドが恋愛をする相手に求める女性像は、自分の内面が求め

る真の愛ではなく、「金持ちで世間も認める美女」という、他者から羨ましがられる外面的な女性像なのである。すなわち、彼において重要な価値は、富であり、名声であり、美人の女性であり、これらはいずれも外面的な価値であり内面からのものではない。そのため彼の恋愛が成就して結婚しても、心温かい家庭を作ることにはならず、破局へと導かれていく。

このような問題意識を持って、彼の作品を読むと、彼の小説を生み出すアイデアや構想が見えてくる。フィッツジェラルドにおける創作とは、矛盾した内面葛藤をもつ彼の内なる叫びであり、現実を受け入れられない自我の解放を求めるものとも考えられる。以上のような視点を踏まえて、The Great Gatsby の登場人物からその時代を生きた人物像を考えてみたい。

Ⅲ. 登場人物

Ⅲ-1. 男性

Ⅲ-1-1. ギャツビー

まず、この作品の主人公であるギャツビーに焦点を当てていきたい。

ギャツビーは、野心に生き、危険を冒して膨大な富を手に入れ、アメリカン・ドリームを手に入れた人物として登場している。ギャツビーの野心は富を手に入れたのちに、最後の目標である Daisy の愛を再び手に入れることである。このことは彼が、少年時代の愛読書 *Hopalong Cassidy* の巻末の見返しに、フランクリンの『自叙伝』 *Autobiography* を手本としたと考えられる「時間割」と13の徳に似た「誓」を書き込んでいたことからもうかがうことができる。これについては、フランクリンを指摘する批評家の一人 Ann Massa が、

If Gatsby's list of self-improvement resolves is closely modeled on Benjamin Franklin's eighteenth-century rules for self-improvement, it also demonstrates a falling off in the intensity and purity of the resolves. Franklin's industry becomes No wasting at Shafters. Cleanliness becomes Bath every other day.²⁾

と述べているように、フランクリンとギャツビーの類似点はいくつか挙げられるのだが、それでは違いはどこにあるのだろうか。

フランクリンの徳目に比べてギャツビーの掲げた徳目は、極めて具体的で実行しやすく、理想とは言い難い。例えば、フランクリンにおける Sincerity, Justice といった抽象的な徳目はギャツビーの誓には含まれておらず、フランクリンにおける Justice は、ギャツビーではせいぜい Be better to parents. に置き換えられている。ギャツビーのスケジュールの Dumbbell exercise and wall-scaling, Baseball and sports, etc などはフランクリンには見られない項

目で、18世紀のフランクリン時代から考えると、スポーツや科学の発達を窺わせる。しかしながら、大きな違いは、フランクリンには神の信仰があり、神の存在、神が世界を創造し、摂理に従って世界を支配していることを認めた信仰告白が『自叙伝』には見られるのに対し、ギャツビーが一日をどのように使うかを定めた Order には、一日を Address powerful Goodness! で始め、晩には What good have I done today?³⁾ の設問で自己反省をしているのが見られるだけで、神への信仰が見られないことである。

このことは、当時のアメリカ文化が、フランクリンの道徳性を揚げながらも、内心では富と名声を勝ち取りたいという表面的なアメリカン・ドリームに走っていたことを表している。この表面的なアメリカン・ドリームはフィツジェラルドの生まれ育った環境の価値観を代弁しており、ギャツビーがフィツジェラルドの願望を生きる代役といえる。

ギャツビーは“shiftless and unsuccessful”では満足せず、“vast, vulgar, meretricious beauty”を実現するために家を飛び出したが、このことは、普通では歳月と共に薄れていくだろう少年時代の夢に終わらず、青年になって富を得た後も、薄れることなく彼を動かし、最終目標である昔失った愛を再び取り戻すという行動にまで発展する。

フィツジェラルドの描くこのギャツビーの夢はアメリカン・ドリームであるとよく言われるが、そういう要素はどこにあるのだろうか。フィツジェラルドが“a short version of *The Great Gatsby*”と言っている *Winter Dreams* での、Dexter の夢とギャツビーの夢はどう違うのだろうか。

Winter Dreams のデクスター、*The Great Gatsby* のギャツビーは共に若くて美人の金持ちの女性に全てを賭けるが、彼らの経済的成功にもかかわらず、彼らの夢は虚しく潰れてしまう。彼らの第一次世界大戦への出征、中西部からニューヨークへの進出という状況設定をも含めて、二つの作品はロマンティックな夢とその終わりを描いている。

Winter Dreams のデクスターには、夢を膨らませて実を結ばせようとする絶え間のない努力と不屈の意志は見当たらない。*Winter Dreams* のストーリー展開は、単なる偶然でしかありえない。14歳の「夢の始まり」から32歳の「夢の終わり」まで、デクスターと Judy には3度の出会いがあった。しかし、これらの3度の出会いは全く偶然によるもので、デクスターにはジュディに対して再会したい、という意欲と努力は全く見られない。つまり、ギャツビーの場合とは違って、デクスターにとってのジュディは、成功したいという夢、つまり願望にはなりえないのである。11歳から23歳までの再会に至るまでの12年間、25歳の別れから32歳でジュディの消息を耳にするまでの7年の間に、夢が具体性を持ち、成長していくことも可能であった。しかしながら、夢は成長することなくその努力をすることもなかった。一般に、普通の男女の恋愛経験は大体このような推移を経て、初恋物語を終えるのが通例である。

つまり、デクスターの夢は、一般の初恋物語のように、淡い思い出にとどめておいて、ど

こまでもその対象を追い求め恋を実現しようとはしないのだが、ギャツビーの夢は、思い出だけとはせず、情熱を燃やし続け、過去という時間を再び取り戻すという幻想を追い求める「夢」なのである。

このギャツビーの夢には、アメリカン・ドリームといえるロマンティックな一面がある。ギャツビーは、憧れ続けてきた Daisy の家に灯る彼にとっての彼女の象徴である “the green light” を見つめ、ニックに声をかけるのをためらわせるほど一人でそれに満足し、両手を海に向けて差し出している。

“I could have sworn he was trembling.” (p. 21) とニックに言わせるほどギャツビーは “the green light” を見て感動している。あくまでも象徴に過ぎない “the green light” に対し、身体を震わせるほど感動できるロマンティックな心の持ち主として描かれているギャツビーは、他の無責任な上流階級の登場人物たちからひととき目立っている。

しかし、このギャツビーの追い求める「夢」の世界は、彼の心の中で長年に亘り、育み続けられたため、いつの間にか現実を超えていき、人妻という現実を生きているデイジーの意識をはるかに超えてしまい、夢は幻想となっていくのである。彼は直感の中では、そうした夢は儚く移りゆく社会と人々の意識の中で結局は挫折に終わることを予知していたのであろう。だからフィツジェラルド自身は努力を積み重ねて手に入れた成功に憧れながらも、そこに潜む危険を予感し、距離をおこうとしているように思われる。

フィツジェラルドは Keats に傾倒していたために、全体的に抒情の流れがロマンティックである。その上に、人の臼歯をカフスボタンに使用するという奇抜さや、彼のパーティーに出席した有名人名簿や、彼の意図によりモンテネグロから贈られた勲章などが奇抜な効果を発揮して、話全体の面白さや非凡さをだして、対照的にギャツビーの夢を浮き上がらせている。このようにギャツビーの夢を追ってきたが、こうした表現は、“the green light” であるデイジーの愛を手に入れるために、不正手段に訴えてでも富を得ようとし、少しでもその夢を実現しようとした彼の姿を描いているのである。

それでは、ギャツビーにとって富とはどんな意味があるのだろうか。フィツジェラルドはギャツビーの「富へ至る道」を必ずしも「徳に至る道」とは描いてはいない。ギャツビーの精神的なものを物質的なもの、つまり富に結び付けている。

and Gatsby was overwhelmingly aware of the youth and mystery that wealth imprisons and preserves, of the freshness of many clothes, and of Daisy, gleaming like silver, safe and proud above the hot struggles of the poor. (p. 150)

富はデイジーを守り、彼女に銀のような輝きを与える。我々は銀という言葉によって、デイ

ジーが富と結びついているのがわかる。この小説は、富を示す金や銀など色彩豊かである。

このように考えていくと、富またはそれに関する記述が多いのに気づく。富に関する他の記述に、当時のアメリカン・ドリームの具体的な富の象徴として挙げられる豪華な車、豪邸、色とりどりのシャツなどがある。その時代背景から考えると、1920年代の米国資本主義は、第一次世界大戦後の繁栄の時代で、20世紀初頭以来、発達しつつあった自動車、ラジオ、電気器具（洗濯機、掃除機など）、ゴルフ、そしてクリーニング店の利用率の急増、などが市民の日常生活に普及していった段階である。ギャツビーが車に対して示す異常な熱狂ぶりは、当時の大衆が最も熱心に受け入れ、興味を持っていたものが何であったかを物語っている。

ここで、この作品に73回も出てくる車について触れてみたい。登場人物はそれぞれの乗っている車で視覚的に特徴を表されている。ニックは昔ながらの地味なダッジにのり、Buchanan 夫妻は大金持ちなので、今さら見栄を張る必要もなく「ゆったりとした走りのクーペ」に乗っている。ガレージを改造して馬屋にするくらいである。一方、ギャツビーは少なくとも三台の車を所有していて、その中の一台はロールスロイスである。

At nine o'clock, one morning late in July, Gatsby's gorgeous car lurched up the rocky drive to my door and gave out a burst of melody from its three-noted horn. (p. 63)

It was a rich cream color, bright with nickel, swollen here and there in its monstrous length with triumphant hat-boxes and supper boxes and tool-boxes, and terraced with a labyrinth of wind-shields that mirrored a dozen suns.... (p. 64)

これは、いわば動く West Egg を象徴している。またデイジーは、ギャツビーの車を走らせて灰の谷を抜けていく時、その灰の谷で車を売買している George. B. Wilson の妻であり、彼女の夫の愛人である Myrtle を轢き殺し、物語の終わりを告げる二人の死の原因さえも作っている。

フィツジェラルドにとって、ギャツビーの贅沢な車の描写が大切なのではない。前述の色彩の豊かさと同じように、我々の視覚に訴えて、アメリカン・ドリームの幻想的なイメージを与えていることが大切なのである。

次に、ギャツビーにとっての色とりどりのシャツはどうであろうか？ギャツビーの銀色のシャツは実際に機械、あるいは人間によって作られたどんなシャツよりもはるかにギャツビーにとって大切である。ギャツビーにとってのシャツ、そして車や豪邸のようなものは、それ自体が重要なのではなく、それらの意味するものが大切なのである。そして、それらの表すものがギャツビーの夢、つまり成功である。ギャツビーはただ単にこれらのシャツを着てい

るのではなく、それらを敬っている。これらは単なる materialistic なものではなく、spiritual な意味を含んだ神聖なものとして描かれているのである。

苦勞して手に入れた富の一つであるシャツを神聖なものとしてデイジーに示したが、山と積まれた色彩あふれるシャツにデイジーは涙を流すものの、その表面的象徴としか理解できない。そして、それを示すギャツビーも富によって精神的な徳の代弁が出来る、と信じていたところに ambivalence を感じざるをえない。ギャツビーは夢を物理的なものに置き換えてしまった為に、ambivalence を生み出してしまい、デイジーに届かなかったとも考えられるであろう。

ここで語り手であるニックの描いたギャツビーに注目してみよう。

Only Gatsby, the man who gives his name to this book, was exempt from my reaction—Gatsby, who represented everything for which I have an unaffected scorn. If personality is an unbroken series of successful gestures, then there was something gorgeous about him, some heightened sensitivity to the promises of life, as if he were related to one of those intricate machines that register earthquakes a ten thousand miles away. This responsiveness had nothing to do with that flabby impressionability, which is dignified under the name of “creative temperament”—it was an extraordinary gift for hope, a romantic readiness ... all right at the end; it is what preyed on Gatsby. (p. 2)

という出だいで、ニックはギャツビーについて語り始める。フィツジェラルドが Great の「偉大さ」の言葉通りの意味を強調したかったのは明白である。そうであるから、最初はこのようにギャツビーの事を語り始めておいて、終わりには、“You’re worth the whole damn bunch put together.” (p. 154) と言っているところからもわかるように、ギャツビーによせるフィツジェラルドの並々ならない思い入れが込められているに違いない。だが、一方においてはこの “great” という形容詞にフィツジェラルドは全く別の ironical な響きを持たせたかったに違いない。ギャツビーは酒の密売で儲けた Trimalchio である。まさに “Gatsby, who represented everything for which I have an unaffected scorn.” (p. 2) の面も備えている。フィツジェラルドはこの “great” という形容詞で、ギャツビーの「偉大さ」と「偉大さの欠如」を含んだ *The Great Gatsby* という題にしたと考えられる。

またフィツジェラルドは、Tom とギャツビーを意識的に対照的に描いている。トムもギャツビーも共に富を手中に収めているが、本質的には正反対な世界に生きている。その対立を通して、ニックはより明白な形でのギャツビーの得たアメリカン・ドリーム「偉大さ」とその脆さを認識することになる。その対立は、当時の社会の階級闘争と深い関係にあるトム

の「現実主義」と、それに対するギャツビーの「ロマンティシズムあるいは、夢想主義」の対立である。小説ではいずれの道も安住の地への道ではなく、最後には破滅という不安が待ち受けていることを暗示している。

上流階級を目指す人々は、手段はどうあれギャツビーのように社会の成功者として富を確保することが当時の男性に課せられた試練であり、この試練に勝ち残った者だけが男性としての勲章を獲得でき、富に加えて理想とする女性をも手に入れることができるというものである。だからこそ内面に純粹さを持つギャツビーも、アメリカン・ドリームへの挑戦を余儀なくされていたとも言える。

Ⅲ-1-2. ニック

ここまでは、ギャツビーが少年時代から育ててきたアメリカン・ドリーム、言い換えるとギャツビーが幻想してきた愛と富について述べてきた。次は夢破れたギャツビーと対照的に描かれているニックについて述べてみる。

ニックもギャツビーと同じように夢を持っていたが、ギャツビーほど激しい形をとっていない。それは何故だろうか。ギャツビーとの違いは何であろうか。

まず、ニックは傍観者として描かれており、我々にギャツビーの行動を伝えている。例えば、ギャツビーのけばけばしい美感覚にはなじめないのであるが、非合法な手段に訴えてでも人生の可能性を発展させようとするギャツビーのバイタリティと実行力に驚く反面、デイズーへの生涯をかけての熱烈な恋を打ち明けられて、またその献身ぶりを目の当たりして、次第にギャツビーの純粹無垢な愛情に打たれていくのである。このギャツビーに対する ambivalence な感情を持つニックは、語り手を務めており、場面のどこへでも顔を出すか、決して邪魔にはなっていない。その中で、真実を冷静に観察して話を進めていく。David L. Minter は、語り手の立場をとっているニックについて次のように述べている。

Carraway's triumph derives from his ability to stand both "within and without" the action he narrates—his ability to be a participant yet a "watcher in the darkening streets"—his ability to give himself, like Jame's wondering dawdlers, to always "looking up and wandering...simultaneously enchanted and repelled by the inexhaustible variety of life" his ability, in fine, not only in observing to wonder but, through narrating to cause another to wonder.⁴⁾

このように、ニックは insider, outsider 的立場をとる ambivalent な面を持っている。例えば、金持ち階級の腐敗やそのいい加減さに対しては憎悪を抱くけれども、彼らの旺盛な生活力には羨みを感じる。東部に対しても、ギャツビーに対しても、また Jordan に対しても、魅惑

されると同時にそれらに反発を感じる性向をもっているからである。

また、ギャツビー、デージー、ニック、ジョーダン、トムがそろってニューヨークに行き、ギャツビーとトムが対決したホテルでは、暑くて汗のしずくが垂れ、行き詰るほどの沈黙が続き、ギャツビーとトムの話が急展開を迎え、緊張も最高潮に達していた。ここでは、そこにいた5人はこの緊張した場面にどっぷりつかりその世界に浸っていた。ニックはギャツビーを信頼し、十分同情を感じ、insider 的立場にいるはずなのに、デージーがその緊張に耐え切れずその場を逃げ出し、ギャツビーはデージーを追って出て行った直後には、“I just remembered that today’s my birthday,” and to think “before me stretched the portentous, menacing road of a new decade.” (p. 136) という全く別世界にいるような感覚を備えている。しかもギャツビーの夢が散ってしまったのを目撃しながら、ギャツビーのことではなく、突然自分の事を “I just remembered that today’s my birthday.” と述べ、さらに “Before me stretched the portentous,…” と冷静に自分の人生観を感じる余裕があるところは、全く outsider 的立場にいる。

within (insider), without (outsider) という感情を同時に保持する能力は、人間の営みに対する十分な理解ある視点を持つための条件でもあるだろう。外部からのみ観察するものは共感を伴った理解を欠き、あまりに対象に入り込んだものは感情移入のあまり正確な判断を下しがたい。共感と客観性を兼ね備えてこそ、真の理解を得ることが可能になる。

対象に深く入り込むことなく、何故このように冷静に傍観者としての立場を守ることが出来たのであろうか。それは、“I’m inclined to reserve all judgments, a habit that has opened up many curious natures to me.” (p. 136) という過程があったからである。ギャツビーの父親とは違い、ニックの父がそのような格言をニックに授けたのにも理由がある。これは、ニックが貧しさの味を知らず、ハンガリーということを知らない家庭に育ったからである。仕事を選ぶ時にも、親戚が話し合うくらいであるし、父親は一年間ニューヨークへの仕送りを認めるほどの余裕がある。そのような家庭環境で育ったニックに比べ、自分の良心を否定し、そして貧しさにも耐えられずに家を飛び出してしまったギャツビーの境遇とは大きく異なっている。ニックは父の格言を忠実に守り、用心深く careful であろうとする。また、人に頼られることも望まず、“I wanted the world to be in uniform and at a sort of moral attention forever.” (p. 136) という moralistic な考え方を持っているが、言い換えれば物事に対して熱くはなれず覚めた見方をしているのである。そのようなニックであるから、自分は the hard rock に立って物事を見ており、自分とギャツビーには相違点があることに気づいている。

前述したように、ニックは父からの格言、“Whenever you feel like criticizing anyone,” he told me, “just remember that all the people in this world haven’t had the advantages that you’ve had.” (p. 1) を忠実に守るほど、父親はニックの人格形成に深く関わっている。ニッ

クと父親は、夢ではなく現実のレベルでしっかりと結びついているために、ニックは物を見る目を養い、成長し（ニックの initiation story ということは何度も言われてきた）現実を悟ることが出来る。それぞれの父親が夢と現実を決定的にして、ギャツビーを死へ、そしてニックをもう一度人生のやり直しへ、と導いている。このように家庭環境と影響を与えた父親を観察したうえで、傍観者としてのニックの行動を考えてみる。

これまで述べてきたように、within と without にいるニックは、ギャツビーと違い、夢を追う若者のように一つの行動に走り続ける事はない。そういう意味ではニックは、酔えない人間であり常に覚めた意識を持って行動している。ギャツビーは5年の歳月をかけてやっと納得したこと、つまりデイジーは結局はトムの世界の人間なのだという事実を、ニックは一度で悟る。

しかも彼は、それに気づいていてもギャツビーに忠告しないし、またマートルはギャツビーにではなくて、デイジーに轢かれたという事実も明らかにしようとはしない。これもニックの特徴といえる。ニックとジョーダンの恋愛は、ギャツビーとデイジーの話しと共に描かれている。ニックとジョーダンとの間の恋も、冷めた者同士の常として実らず不毛に終わってしまう。ジョーダンが自分を有利にするためには、平気で嘘をつく不誠実な人間であると気付き、

Jordan Baker instinctively avoided clever, shrewd men, and now I saw that this was because she felt safer on a plane where any divergence from a code would be thought impossible. She was incurably dishonest. (p. 58)

と述べているのだが、“Dishonesty in a woman is a thing you never blame deeply—I was casually sorry, and then I forgot.” (p. 59) と許してしまう。このようにニックとジョーダンの恋は決して激しいものではなく、ギャツビーのような努力の跡もなく、追い求めようというところもない。ニックが、ニューヨークに出てくる前の恋愛も同様である。むしろ、うやむやにするために逃げている。ギャツビーは、“Gatsby believed in the green light, the orgiastic future that year by year recedes before us.” (p. 182) と描かれているが、ニックは冷ややかに覚めており、夢は実現することはあり得ない幻想であることを冷静に理解している。それはニックの場合、父からの格言を教訓として体得していた上に、夢を実現させようとするために銀行業務やクレジットや投資信託に関する本を買い込み、その上他の本をたくさん読み、「円満なる人間」という人格者になろうと努力していたからである。その結果、人生を冷静な視点から観察することが出来る能力を身につけ、ギャツビーのように激しく“the green light”を追い求めるとその結果がどうなるかを知ってしまうのである。このようにして、全

てを悟ったニックは、東部で“the green light”を追い求めることをやめ、中西部へ帰る、というところでこの物語は終わっている。

作者フィッツジェラルドがニックに与えた役割は何だったのか。思うにニックこそフィッツジェラルドの知性なのではないのだろうか。ギャツビーはフィッツジェラルドの野心と情念の世界を代理して生きる登場人物であるが、ニックはそういう自分を客観視して見つめる知性を代理しているものと思われる。急激に変革するアメリカ社会の中で、経済、社会、そして男女関係の問題が大きく揺れている様子を、登場人物を通して、読者に暴いていく語り手として登場させているのである。

Ⅲ-1-3. トム

トムは、ニックの大学の級友として登場する。彼は大金持ちの息子として生まれ、フットボール選手としても国民的英雄ともてはやされた男性である。財力、体力、男性らしさのどれをとってもアメリカ男性が理想とする人生を生きている。換言すれば彼は既に上流階級に属し、アメリカン・ドリームを必要としない立場にある男性である。しかし私生活では公然とニューヨークに妻も知る愛人を持ち、そこに堂々と通う生活を送るわがまま放題の男性でもある。

フィッツジェラルドはトムを誰もが持つ成功者のイメージ、すなわち富と名声と、そして美人の妻という全てを獲得した人物として描いている。が、トム自身はそれに満足できず、常に何かを求めてさまよっている。彼もまた、単純な男性像のゆえに、破滅の道に至る弱さを内在させていることをこの小説は示唆している。

Ⅲ-2. 女性

Ⅲ-2-1. マートル

マートルは、知らない人はいない、とジョーダンがいうほど、オープンにしている愛人であり、みんながその関係を知っている。そしてその上で、ニューヨークのアパートにも集まってくる。

トムからしてみれば、マートルは彼女がニューヨークでトムに買ってもらった犬のようなもの、つまり産褥のときにデイジーに付き添わず遊びまわっていたトムのエゴを満足させるものの中の一人にすぎない。マートルが亡くなった時もトムは、マートルに買い与えた犬のビスケットの缶を見て泣いた、とニックに言っているように、一人の女性とは考えていない。

マートルは、自分はトムと同じ階級であると錯覚してデイジーの名前を呼び続け、トムに顔を殴られるのであるが、トムがマートルをぶったのは、夫として妻の名誉を守るためではなく、ただ単にトムの偽善と凶暴性が現れたに過ぎない。一方マートルが常に考えていることは、ウイルソンの階級を逃れて上流階級に属することであり、そのために彼女は、ばかば

かしい誇示をしながら、いつのまにか、自分がトムと同じ階級にいるような錯覚を起こしてしまうのである。これはまるでピエロを演じているようだ。例えば、「デイジー、デイジー」と繰り返しトムの前で叫んでみたり、高価な服への興味を示しながらも、“It’s just a crazy old thing,” (p. 31) と言ったりするところである。マートルは、ウイルソンが自分たちの結婚式に出席するのに人の服を借りてこなければならなかったと気づくと、ウイルソンと結婚したことを後悔し、“I married him because I thought he was a gentleman,” she said finally, “I thought he knew something about breeding, but he wasn’t fit to lick my shoe.” (p. 35) と述べる。彼女は、ウイルソンは自分の服を持っていないから紳士ではなく、トムのように、スーツを着て革の靴をはいているのが紳士だと思い込んでいるのである。少しでもマートルは、自分がトムの階級に属しているように見せかけようとして、子犬を買うときは、トムとニックの前では、“bitch”という言葉を使うのをためらい、“dog”という言葉を選んで使っている。マートルは、自分には犬を買う余裕がある、と人に誇示したかったのである。彼女は高価な首輪をその犬の為にトムに買ってもらっているが、マートルにとっては、それはまるでギャツビーの追い求める“the green light”のようなものであったのかもしれない。しかし、トムにとっては、マートルは犬を売っている自転車籠の何匹もいるの中から選べる犬の一匹にすぎない。とはいうものの、マートルの品格のなさは、トムにうまく溶け込んでいる。

このようなマートルであるから、この小説で最初に読者に紹介されるときはデイジーたちの夕食の邪魔をしてしまい、そのためにデイジーとトムの間に、そして、ジョーダン、ニックにも緊張をもたらす。マートルはデイジーやジョーダンよりも年上で、服の色からも、彼女達よりは暗い色で、労働者階級であることがうかがえる。

また、タクシーを拾うためには、“she let four taxicabs drive away before she selected a new one, lavender-colored with gray upholstery,” (p. 27) とまでして、タクシーにこだわり、自分が上流階級に属しているかのように振舞っている。

そのマートルは、夫のウイルソンとは対照的に活力が溢れ出しており、そのあふれ出る活力ゆえに、灰の谷からの脱出を求めて、血を流し続ける。マートルは、ニックに初めて会った時はウイルソンと共に灰の谷に埋もれていたが、彼らがニューヨークのアパートで開いたパーティーでは、華やかな世界に浸り、「デイジー、デイジー」と叫び続けたためにトムに殴られて血を流してしまう。彼女は溢れる活力を無為に流し、皮肉にも最後にはトムの妻のデイジーの運転する車にはねられ、全ての活力、血を流し切って死に至る。結局彼女は、常に責任から逃れてしまう無神経な金持ち階級（しかし彼女はそれに憧れ、真似をしていたのだが）の犠牲者になってしまう。トムと同じ階級でありたい、と夢を持っていたが、それは叶うことなくギャツビーと同じく、夢破れた存在として描かれている。換言すれば、マートルの人生は、女性の道における1つのアメリカン・ドリームを夢見て生きたが、失敗に終わっ

た人生を表現している。

マートルは、多くの女性がそうであったように、社会的に自立する手段が無い環境下で、アメリカン・ドリームに挑んだのだとも言える。まだ社会のジェンダーフリー化が進んでない時代の悲劇とも言える。

Ⅲ-2-2. ジョーダン

ジョーダンは、デイジーやマートルとは違う。当時ゼルダは女性が自分を注意深く売り込むことを称賛して、「若い女性が生まれつき持っているものを巧みに利用して、自分の価値に見合う財産を手に入れることを、フラッパーの世界は可能にしました。女性は自分の若さを利用して、ビジネスをしているだけです」と述べているように、⁵⁾ ジョーダンは、その当時の先端をいく自立した女性として描かれ、それも男性、女性を問わずプロゴルファーという職業についている。Iで述べたように、第一次世界大戦後の世界は、女性の参政権も認められ、経済的に自立も出来るようになった女性にとっては目覚ましく発展しつつあった時代である。その中でも、ひときわ華やかなプロゴルファーなのであるから、ジョーダンはどこへ行っても知名度が高く、ニックにとってジョーダンは同伴するにも恰好の好い人物である。ジョーダンはパーティーのときも、スポーツウェアのようなイヴニングドレスを着ており、まるで女性らしさを失ったようである。そしてニックは、ジョーダンはどうしてもなく不正直なのを見抜いている。ジョーダンは、自分にふりかかってくる不利なことには耐えられず、嘘をついてでも不正を行ってでも他の人達より自分を有利な立場に保とうとする。彼女は、“her wan, scornful mouth” (p. 81) をしており、常に自尊心に満ちた態度をとっている。ジョーダンを支えているものは、自分が作り上げた自分のイメージであろう。華やかなプロゴルファーとしてその中では嘘の噂の中心になっているものの、男性に頼らず女性として自分の職業を持って自立している点ではこの作品の他の女性達とは全く異なっている。本来のジョーダンは、ギャツビーと同じく資産も家族背景もない孤独な女性である。属する資格のない上層社会に、切れ味鋭い個性を身にまとってしがみついているジョーダンは、自分の立場を守るためには、不正も嘘も一つの武器として気に掛けない。彼女にとっての不正や嘘は、自分の立場を守り続けるためには、当然の手段なのである。

それであるから、自分をちやほやする男性達は拒まないが、自分の本性を見抜くだけの知性を備えた男性は警戒して近寄せない。このような小悪魔的なジョーダんに、最初は好意を寄せたニックであったが、最後にはニックから別れを告げる。ジョーダンは、ニックから別れを告げられるとは考えてもいなかったもので、結局は捨てられた、と感じ、“Nevertheless you did throw me over,” said Jordan suddenly. “You threw me over on the telephone. I don’t give a damn about you now, but it was a new experience for me, and I felt a little dizzy for a while.” (p. 179) と強がってみせる。そして、二人は別れの握手を交わした後、

“You said a bad driver was only safe until she met another driver? Well, I met another bad driver, didn’t I? I mean it was careless of me to make such a wrong guess. I thought you were rather an honest, straightforward person. I thought it was your secret pride.” (p. 179)

と半ばニックを非難さえしている。逆に考えるとジョーダンは、自分の持っていないものを持っているニックの誠実さに惹かれている、というところは、ニックはジョーダンにとっての“the green light”になっていたとも考えられる。

このように考えてみると物事に対して無関心な sophistication と、倦怠の雰囲気漂浮しているジョーダンは、都会の魅力の象徴として、ニック物語にドラマ性を与える存在であるのと同時に Buchanan 夫妻の日常生活の裏の情報提供者であり、語り手であるニックがギャツビーとデイジーとの出会いの話を補足する役割を果たしている点も見落としてはならない。そしてジョーダンはこのように色々な役割を担っているのであるが、デイジーとギャツビーが昔知り合いであったことをトムに告げようとししないのも彼女の特徴であり、ニックが、マートルを轢き殺したのはギャツビーではなくデイジーであることを告げようとししないのと同じような共通点を持っている。ジョーダンの女性としてのアメリカン・ドリームは、スポーツを通じて富と名声を勝ち得て、男性と自由な恋をして楽しく生きることにより、当時最先端の女性スターとしての生き方が描かれている。

すなわちジョーダンこそフィッツジェラルドが描いた女性のジェンダーフリーな生き方であろう。しかしフィッツジェラルドの描くジョーダンにはなぜか否定的なニュアンスが強く、フィッツジェラルド自身は美人で裕福である女性が価値ある女性だとの意識が強いことを窺わせる。

III-2-3. デイジー

マートル、ジョーダンに増して重要な役割を果たしている女性がデイジーである。デイジーは物語の初めのころにニックに自分の不幸を語るころから、我々はデイジーとトムの結婚生活を知ることが出来る。夫のトムは、ほとんど新婚直後からデイジーに不実であり彼女が初産の産褥にいた時でさえ、デイジーに付き添うことなく家を空けていた。彼女は、生まれてきた子どもが女の子だと聞かされると顔をそむけながら、

“All right”, I said, “I’m glad it’s a girl. And I hope she’ll be a fool—that’s the best thing a girl can be in this world, a beautiful little fool.” (p. 17)

とトムの不実を知りながら出産したことに対して投げやりになってしまっている。これは、フィッツジェラルドの妻のゼルダ自身が語った、「陽気で物事をあまり深く考えず、慣習にと

らわれないで自分のことは自分でやってしまう女性のほうが幸せよ。生涯仕事をしたところで、一生懸命働かなくてはいけないし、知性を磨いても、寂しくて暗い気持ちになってしまうわ。娘のパットには天才でなくてもいいの。フラッパーになってほしいわ。フラッパーのほうが勇敢で、陽気で、美しいと思いませんか。』⁶⁾の中にも、現れている。

Her eyes flashed around her in a defiant way, rather like Tom's, and she laughed with thrilling scorn. "Sophisticated—God, I'm sophisticated!" (p. 18)

という絶望的、挑戦的な告白は哀切に響きいかにも芝居気たっぷりでニックに訴えかけているのだが、そういった数分後には顔いっぴいのにやにや笑いを見せて、その哀切が見せかけだけのものであり、つまり本質的にはトムと同じ世界に属する人間であることを暴露してしまう。デイジーは、夫の不実を知りながら何らかの決然とした手段をとることはなく、現在の居心地のいい富裕階級の座から離れようとしなない。こうしたデイジーは、自分より上の階級に這い上がろうとしてあがいているマートルと比べても、職業を持ち自分の力で生きようとしているジョーダンと比べても、無気力な惰性で生きているイメージを与える。自分でトムとギャツビーのどちらを本当に愛しているかという判断をも持たない。むしろ、持とうとはしていない。言い換えると、双方の良いところを両方とも手に入れようとしていると思われる。だから、トムが自分を裏切っていることを知っていても離婚を求めず、ギャツビーが自分を深く愛していることを知っていながらも、トムの確かなゆるぎない富を手放そうとはしない。ギャツビーとは逢瀬を重ねて彼が自分を真に愛し続けてくれていると感じても、それでもトムのもつ階級と富の魅力に負けて最後にはトムという安易な道を選ぶのである。ギャツビーの愛が真実だと感じられても、その真実に身を委ねることはしないのである。

デイジーは、トムの邸宅で、"What'll we do with ourselves this afternoon?" cried Daisy, "and the day after that, the next thirty years?" (p. 118) と声を高めて発した言葉においても、結婚について悩んでいた時にも、

And all the time something within her was crying for a decision. She wanted her life shaped now, immediately—and the decision must be made by some force—of love, of money, of unquestionable practicality—that was close at hand. (p. 151)

という風に、決断することから逃げている。換言すると、何かを決断することにより何かを失うことを恐れているのである。そんな時に財力あふれたトムが現れたので、"Doubtless there was a certain struggle and a certain relief." (p. 158) と揺るぎない安定性に心を動かさ

れてしまう。これはデイジーの女性としての打算と自分の内なる真実の声に耳を閉ざして虚構の世界での安定を求める生き方を示している。

この生き方はアメリカン・ドリームの時代にあって、既に富も榮譽も持っている側に生きる人達に共通するものであって、人生における墮落と退廢の匂いを放って生きる女性の生き方を象徴している。

ニックはデイジーとトムを、

It seemed to me that the thing for Daisy to do was to rush out of the house, child in arms—but apparently there were no such intensions in her head. As for Tom, the fact that he “had some woman in New York” was really less surprising than that he had been depressed by a book. (p. 20-21)

と見ているのだが、実際にはデイジーはトムの世界に浸りきっている。居心地のよい現実を捨てて夢を持つとしないデイジーとトムは、二人とも現実のレベルに生きている。デイジーは、戦場に行き、手違いでなかなか帰国できないギャツビーを待つことが出来ず、前述したように現実には富と地位を持つ男性トムを選び、夢を捨ててしまった。トムもデイジーと同様に実情に麻痺していて、デイジーが暴露したように現実には生きている感覚さえ欠落している。このように夢を持たず、惰性で生きているトムとデイジーの前に、ギャツビーは夢の実現者として姿を現すのだから、彼らにはギャツビーの存在が異様に思われたであろう。デイジーはニューヨークからロングアイランドへ帰る途中にギャツビーの車に乗り運転をして、皮肉にも夫の愛人を轢き殺してしまう。ギャツビーは自分が運転をしていて事故を起こしたことにして、デイジーの罪をかばおうとする。デイジーには、ギャツビーが自分の秘密を漏らしたり自己を不利な立場に追い込むようなことをすることは考えられなかったであろう。まして、自分の秘密をニックが知ることになっていようとはなお一層考えられなかったであろう。たとえ考えられたとしてもデイジーは、ニックもギャツビーと同じように自分を不利な立場に追い込むようなことをする人間ではない、と信じ切っていたのであろう。いずれにしてもギャツビーは、自分を心から愛してくれていて自分の罪を見逃してくれると確信しているので自分の身代りに罪を被ってくれると考えた。このときデイジーはギャツビーよりも、富も財産も堅固なトムを頼るほうが自分にとっては得であると考えたと思われる。

小説の冒頭でニックが初めてデイジーを訪ねると、デイジーは娘時代同様、白い服を着ている。

It was the kind of voice that the ear follows up and down, as if each speech is an

arrangement of notes that will never be played again. Her face was sad and lovely with bright things in it, bright eyes and a bright passionate mouth, but there was an excitement in her voice that men who had cared for her found difficult to forget: a singing compulsion, a whispered “Listen,” a promise that she had done gay, exciting things just a while since and that there were gay, exciting things hovering in the next hour. (p. 9)

と以前のデイジーとは変わっていない。しかし、その眼には何の望みも持たない人間の空虚さが漂っている。大したことでないことをさも重大そうに相手の耳元に口を寄せてささやくその声は、悲しくも空々しい響きをもたらしているのである。

また、“Sophisticated—God, I’m sophisticated!” (p. 18) と言っているデイジーの sophistication は, thrilling scorn (p. 18) を含んでいる insincerity に他ならない。美しい顔も魅力的な声もうわべだけのものであって、本物ではない。彼女は、“...she looked at me with an absolute smirk on her lovely face, as if she had asserted her membership in a rather distinguished secret society to which she and Tom belonged.” (p. 18) とも描かれているが、声や作り笑いはここでも彼女の内面を表している。このようなデイジーであるから彼女はギャツビーを裏切ることも、マートルを轢き殺してその責任を平気で転嫁することもできる。

このようなデイジーの声、相手の耳元に口を引き寄せてささやくその声は男性を惹きつけるのであるが、フィッツジェラルドは短編 *Winter Dreams* でも女性を同じように描いている。*Winter Dreams* に出てくる女性ジュディは声だけでなく、口元、特に唇、微笑みに独特なものを備えており、そして男性はその微笑みに惹きつけられる運命にある。そうやって、彼女達は男性を惹きつけるという共通点を持っている。男性を惹きつけることによって、自分の存在をことのほかアピールして認めてもらいたいと望んでいる。

Daisy: “Do they miss me?” she cried ecstatically.

Nick: “The whole town is desolate. All the cars have the left rear wheel painted black as a mourning wreath, and there’s a persistent wail all night along the north shore.” (p. 10)

Judy: “Have you missed me?” she asked suddenly.

Dexter: “Everybody missed you.”⁷⁾

女性登場人物は、男性からこのように答えてもらえれば満足でき、またこれが彼女達の自分の存在をほかの人に認めてもらいたい、という自己主張であるかもしれない。デイジーは、

“What’ll we do with ourselves this afternoon?” (p. 118) と聞き、現実の世界に生きているという感覚が欠如して自分で物事を決めることが出来ないのであるが、それでも他の人からは自分の存在を忘れて欲しくはないのである。

デイジーの生き方は既に富を獲得した階級にあり、アメリカン・ドリームを希望に生きる人達の対極にあるといえる。然しながら作者は、皆が目指し夢見る上流階級の世界が、じつは不実と倦怠に満ちた世界であることを彼女の生き方を通して暴露しているのである。

マートル、ジョーダン、デイジーには共通した面も多い。フィツジェラルドの女性への態度を I で述べたが、フィツジェラルドがマートル、ジョーダンとただ一つ違った設定でデイジーを描いている部分は、彼女には子どもがいることである。つまりデイジーは母親なのだ。デイジーには 3 歳になる子どもがいるが、普段は乳母に任せきりで乳母が躰けている。子どもはよく躰けられていて言うことをちゃんと聞く。デイジーにとって子どもは父親に似ておらず自分に似ていて、自分にとって “You dream, you. You absolute little dream.” (p. 117) なのである。子どもとして、というよりは夢として考えている。“Where’s Daddy?” と子どもが尋ねてもそれには答えず、デイジーは子どもにとっての父親像を心の中で否定している。ましてギャツビーにとってデイジーに子どもがいることは、全く現実味を帯びておらず信じられないのと同様、デイジーにとっても娘は非現実のものである。子どもに対して持っている感情は母親らしさを備えていない。トムが人に彼の馬をひけらかすのと同様に、デイジーも人に自分の夢として子どもをひけらかしている。前にギャツビーとニックの父親の影響を述べたが、母親としてのデイジーは適役とはいえない。つまり、父親の存在と対照的に母親は不在なのだ。この母親不在は、フィツジェラルドの他の作品にも共通してみられる。

デイジーは社会や男性が期待する女性を、自分を偽ってでも演じて生きようとしている。これは当時の社会一般に染み透っていた女性への要求であり見方だと思われる。たとえ上流階級に住んでいようとも、社会が要求する生き方をするとこういう形になるのだとフィツジェラルドは示しているのである。

そしてフィツジェラルドの作品に描かれる画一化されたヒロイン像、ヒーロー像、そして彼らの恋愛の形は一様である。彼の描く男性はだれもが美しい女性に憧れ、とりわけ金持ちでない男性はフィツジェラルド自身と同様に、美しい上に財産を持つ女性に憧れを持ち、そういう女性を見ると恍惚となってしまう。ここで男性は冷静な判断力を失い、そういう女性の美は絶対に不滅で崇高なものであると信じ込む錯覚に陥り、美しい金持ちの女性と結婚することによって、自分も絶対価値を手に入れることが出来るのだと錯覚するパターンが多く描かれている。

フィツジェラルドにおける理想とする恋愛、結婚の型が何故このようなパターンになってしまうかと考えた時、その原因は彼が幼くして植えつけられた両親を反面教師とする家族観

に起因すると考える他ない。さらに言うなら、このことはフィツジェラルドの内面深くには女性への憧れ以上に女性への不信感が渦巻いていることをうかがわせるのである。

お わ り に

この時代は、アメリカ社会が出身国や民族の制約から解き放たれ、多くの国民がこぞってアメリカン・ドリームの実現に向けて富と名声の獲得に邁進し、人々は多くの夢と幻想を抱き、男性も女性もそれを手に入れようとして可能性に果敢に挑戦して生きた時代である。

そのような時代を生きた人々をフィツジェラルドは *The Great Gatsby* の中で見事に表現している。登場人物に既に上流階級にある夫婦トムとデイジー、中流階級から才知に長け、手段を選ばずのしあがってきたギャツビーとジョーダン、下層階級にあって上流階級に幻想を抱きながら生きているマートル、そして彼らの確執と戦いを傍観者的に見つめる語り手としてのニックを配置し、物語をアメリカン・ドリームの裏側に漂っている男性と女性の欲望と葛藤のドラマとして描き出している。

特に主人公のギャツビーを、暗黒世界と通じる彼の経歴からは想像できない純愛幻想に生きる男性として、明暗二つの面から描くことによって、他の人達との虚と実の関係をも巧みに描いている。

なぜ、フィツジェラルドがギャツビーのような特異なキャラクターを描くことが出来たのかを考えると、それはフィツジェラルド自身がアメリカン・ドリームを獲得しようともがいて生きたからであり、ギャツビーは作者フィツジェラルドの夢を代行していると思われる。

彼自身が純真な精神を持ちながら、物質的にアメリカン・ドリームを追い求めたことが、ギャツビーにも非合法に生きるギャングであるという一面と、純愛という矛盾した精神世界を同時に持たせることを可能にしているといえる。

一方で、フィツジェラルドはどの登場人物も誰一人として許してはいない。換言すれば人間には全て表と裏があり、アメリカン・ドリームに生きる欲望はもちろん、愛すらも真実は幻想に過ぎないと言っているのである。

この小説はアメリカン・ドリームを生きる男女の恋愛物語になっているが、本当は人間の持つ本質を、悲しくも虚しく描き出したものであり、作者フィツジェラルドの深い人間洞察の結論が表現されている。

Notes

- F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925).
F. Scott Fitzgerald, *Collected Stories of F. Scott Fitzgerald: "The Curious Case of Benjamin Button"* (Barnes & Noble, 2007)
- 1) Gallo, Rose Adrienne. *F. Scott Fitzgerald*. Frederick Ungar Publishing, 1978.
Hook, Andrew. *F. Scott Fitzgerald: A Literary Life*. Macmillan, 2002.
K.G.W. Cross. *Scott Fitzgerald*. (Oliver and Boyd, 1964)
永岡定夫, 坪井清彦共訳, 『完訳フィッツジェラルド伝』 ことばあん書房 1988
 - 2) Ann Massa, *American Literature in Context IV 1900-1930* (London and New York: Methuen, 1982) p. 148.
 - 3) Benjamin Franklin, *Autobiography* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1961) p. 89.
 - 4) David L. Minter, "Dream, Design, and Interpretations of The Great Gatsby": (Twentieth Century Interpretations of The Great Gatsby, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1968) p. 88
 - 5) サラ, エバンズ著, 『アメリカの女性の歴史 自由の為に生まれて』 明石書店 1997 p. 287.
 - 6) Ibid, p. 282.
 - 7) F. Scott Fitzgerald, *The Stories of F. Scott Fitzgerald: Winter Dreams*: Malcolm Cowley Charles Scribner's Sons New York, 1920) P.141.

Bibliography

- Bloom, Harold. *F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*. Chelsea House Publishers, 1986.
Brucoli., Matthew & Emory Elliott, ed. *New Essays on The Great Gatsby*. Cambridge University Press, 1985.
Curnutt, Kirk ed. *A Historical Guide to F. Scott Fitzgerald*. Oxford University Press, 2004.
Goldhurst, William. *F. Scott Fitzgerald and His Contemporaries*. The World Publishing Company, 1963.
Huonder, Eugen. *The Functional Significance of Setting in the novels of Francis Scott Fitzgerald*. European University press, 1974.
Vot, Andre Le. *F. Scott Fitzgerald: a Biography*. Warner Books 1979.
青山誠子訳, 『新フェミニズム批評 女性, 文学, 理論』 岩波書店 1999
赤池鉄士著, 『英語色彩の文化誌』 研究社出版 1981
足立富美著, 『フィッツジェラルド研究』 北星堂 1975
伊藤公雄著, 『男性学入門』 作品社 1996
大橋吉之輔訳, 『ゼルダ: 愛と狂気の生涯』 新潮社版 1974
岡 智子著, 『「男らしさ」の心理学』 裳華房 1998
川上伸雄著, 『ニューヨークを読む』 中公新書 2004
川上忠雄編, 『文学とアメリカの夢』 英宝社 1997
現代英語文学研究会編, 『ジェンダーで読む英語文学』 開文社出版 2000
小堀用一朗著, 『スコット・フィッツジェラルド 一人と作品一』 弓書房 1987
柴田元幸著, 『文学の都市 世界の文学, 文化の現在10講』 東京大学出版会 2007
照山雄彦著, 『スコット・フィッツジェラルド 自己愛にみるロマンス』 英宝社 2004
土居健郎, 小比木啓吾編集解説, 『精神分析』 至文堂 1971
丹羽隆昭著, 『車が語る人間模様—二十世紀アメリカ古典小説再訪』 開文社出版 2007
野間昭二著, 『グレート・ギャツビーの読み方』 創元社 2008
廣野由美子著, 『視線は人を殺すか』 ミネルヴァ書房 2008
村上春樹著訳, 『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』 中央公論新社 2007
宮脇俊文, 高野一良編著, 『アメリカの嘆き 米文学史のピューリタニズム』 松柏社 1999
諸岡俊行訳, 『ジャズ1920年代』 草思社 1985
F. L. アレン著, 『オンリー・イエスタデイ: 1920年代・アメリカ』 ちくま書房 1993

SUMMARY

The Characters in *The Great Gatsby*

by Yuko Yamanaka

The aim of this paper is to study F. Scott Fitzgerald's novel *The Great Gatsby* and the characters involved in this novel by means of closely examining his background and life through the 1920's. Following a consideration of the lives of the author's father, mother and wife in the context of their social and temporal background, there will be individual analyses of each character in *The Great Gatsby*.

In the 1920's, after the end of World War I, there were many changes taking place in America. Of special significance was the strong women's suffrage movement. It was the period where women would become free to make their own lives by seeking outside occupations and not be bound to be housewives only. This period opened up the American Dream for many women. Equally, some of the characters in *The Great Gatsby* sought this same Dream and were able to reach for or attain what they had dreamed of.

As background, this paper also pays attention to other short stories, including *The Curious Case of Benjamin Button*, and *Winter Dreams*, as these shed light on Fitzgerald's background and on the characters involved in *The Great Gatsby*.